

平成になってコンピュータは「ネオダマ」に変わると言われ出した。ネットワークの「ネ」とオープン系の「オ」、そしてダウンサイズの「ダ」、マルチメディアの「マ」のことである。まだ、本格的なインターネットや携帯電話時代の到来が予想だにされなかった時代でもあった。

そして、それまでは四、五年で循環していた景気が平成不況と呼ばれる出口が見えない状況になると、金融関係のシステム予算が削減されはじめた。次に、各メーカーが大量に抱えていた基本ソフト(オー・エス)開発の人員を削減しはじめた。オープンシステムになれば各メーカーはオー・エスの開発競争をしなくなるので当然のことだ。それまで右肩上がりに成長し続けてきたソフト業界にも暗雲が立ち込めてきたのである。当初オープンシステムのオー・エスはユニックス本命で、対抗としてパソコンのエムエス・ドスがあった。ウィンドウズが世に出るまでのパソコンはビジネスユースとしては考えにくい代物だったので大半の企業はユニックスでのオープン化を目指した。しかし、平成五年にウィンドウズが発売されると流れは急速にパソコンを使ったオープン化へ向い、メモリーの驚異的な進歩もあってオープン化は短期間で進展した。

弊社が大宮町の図書館システムをオープンシステムで開発を始めたのは平成六年の夏だった。クロスケーブルとストレートケーブルがあることさえ知らなかったのでサーバーを購入してから一ヶ月も稼働させることが出来なかった事を思い出す。そして、言語を何にするかも大問題で当然それまでのコボルを考えた。ピーシイコボルを購入して研究をはじめた時、東海村の大手通信会社の研究所からビジュアル・ベーシック(VB)をコボルのプログラマーが習得するための工数を調査する仕事が無い込んだ。偶然にも、料金をもらいながら全員のVB教育とSQLサーバーの勉強をさせてもらったので、最新の図書館システムを予定通りの一年で開発することが出来た。

その貴重な経験を基に、翌平成七年五月からオープンのゴルフ場システムの開発を始めた。それまでの十二年間に約二百ヶ所ゴルフ場にオフコンでのシステムを納入していたので設計は簡単に作れるだろうと考えた。ところが、予想に反して要件定義や設計が進まない。オフコンでの処理方法にとらわれてしまうベテランとパソコン派の若手との間に要件定義や設計で大きな食違いが生じてしまった。ベテランはパソコンの処理能力をオフコン並みかそれ以下に思い、若手は全く逆に考えていた。事実十年前のパソコンは処理速度も記憶容量も現在より数百倍も劣っていたので、メモリーオーバーでフリーズしてしまう現象が頻繁に起きていた。インテルのプロセッサがその問題を解決するのは時間の問題であるとは思っていたが、ダウンするシステムではまだ商品にはならなかった。

平成七年の暮れ、以前にオフコンの財務パッケージシステムを導入してもらった仙台のゴルフ場の支配人から連絡が入った。最近、別の会社に移りゴルフ場の支配人をしていて新システム導入を検討していると言うので仙台に向かった。

杜の都・仙台は櫻の街路樹が美しく大好きな街で、特に冬は、その訪れを喜ぶかのように街路樹がイルミネーションに輝いていた。仙台に憧れを抱いたのは、小学校の教科書で魯迅の「藤野先生」を読んだからかも知れない。今の東北大学医学部に留学していた医学生生の魯迅は解剖学の教授、藤野先生の感化を受けて「人民の心の病を治すために文学」の道を選び毛沢東や周恩来に大きな影響を与える。東北地方の田舎町で魯迅が見たニュース映画のみじめな中国人民の映像と藤野先生の言葉が世界史を変える原動力となることなど思いもよらないことで、それは、仙台の冬の厳しい寒さがオーロラを発生させたかのようにすばらしい人生の物語を生んだ。魯迅と藤野先生の出会いの不思議さを思いながら、最新のシステムを認めてくれるのは、先ず、仙台であってくれと願っていた。

ゴルフ場には東京本社から二人の担当者と支配人が待っていた。名刺交換の席で今回のシステム選定はオフコンでなくパソコンシステムにすることが決まっていると聞かされた。準備の時間に十五分を頂き、コンペルームにプロジェクターとデモ機を設置し資料を机の上に置き就職試験の面接でも受けるような気持ちで待っていた。

先ず、私がお社案内とシステム特徴を説明する事にした。これまでのコンピュータと提案するパソコンシステムの違いは多岐にわたっている。「ネオダマ」についての説明だけでも一時間は必要である。そして、説明を聞いたとしてもすぐには理解出来ないだろう。専門家でも自信がもてないところがまだあるのである。魯迅が一つの映像と一つの言葉で医学から文学へ方向を転換させたことを思い、私の説明は出来るだけ簡潔にしなければならぬと考えていた。

これまでのオフコンとパソコンの違いはたくさんありますが、一つだけお話いたします。これまでのコンピュータは毎日のデータを日次更新処理と言う名前のプログラムで消していました。もちろん消すまえに集計処理をしてからです。この集計処理した数字からいろいろな報告書や分析データを出しています。これは、大量のデータを機械が蓄積出来なかったからです。技術革新が進み、今日のパソコンは大量のデータを保存することが安価に出来るようになりました。そこで、集計処理をしてデータを消す必要がなくなりました。生のデータをいつまでも保存するシステムがパソコンのシステムです。生のデータから報告書を作り分析データを出すのです。このデータの蓄積の差が会社の差になるのは歴然です。

次に、若い技術者がシステムの操作をしながら説明をはじめた。その声がいっぴなぐ高く裏返っていた。そして、重要な局面が来ると画面が真っ白にフリーズしてしまった。その日のデモは失敗であったが、幸い、一年後にシステムを導入して頂いた。